

「今、私の晴雨計は！②③」

「シルクロード・河西回廊の旅考」3

平山征夫

ハプニングで夜遅く着いた敦煌のホテル「敦煌山荘」は、鳴沙山を目前に見渡せる素晴らしいロケーションに在った。朝日に特有の陰影を見せる砂漠を見ながらの屋外の朝食は快適だった。

いよいよ長年憧れていた莫高窟の見物だ。朝早くから大勢の観光客でごった返している。我々しかいなかった「榆林窟」とは様変わりだ。石窟に入る前にシルクロードと莫高窟の映像説明を大型スクリーンで見入場、莫高窟のシンボルともいえる北大仏殿の前で記念

撮影をした。流暢な日本語で説明してくれる現地ガイドに感心しながら、有料石窟を含めて十以上の石窟を見たが、さすが中国が世界に誇る仏教芸術の粋は時空を超えて今も我々に大きな感動を与えてくれた。文字通り「砂漠の大画廊」だ。天女は自由に石窟の中を舞っていた。

そのなかでも強く印象に残ったのが57石窟の観音菩薩の絵だ。伏し目がちなその姿は高貴でありどこか艶めかしい。何より美しい。文化財の保存に国際的に活躍され、シルクロードに何度も足を運ばれ、沢山のシルクロードの絵を描かれた平山郁夫画伯が「我が恋人」と呼んだ菩薩だ。平山さんは晩年には莫高窟を訪れると、他には目もく

れずまっすぐ57窟の恋人に逢いに行かれたそう。でもその恋人の写真は撮れない。同性同名の私としてはせめて57窟の菩薩が載っている解説本を買って平山さんへの義理を果たすことにした。

莫高窟にほど近い鳴沙山と月牙泉は砂漠の山とオアシスだ。観光用のラクダに乗った観光客も遠くから鳴沙山をバックに写真に撮れば、シルクロードを行く隊商のように見えるから不思議だ。観光客でごった返すこうした処より私が気に入ったのは陽関と玉門関だ。陽関は狼煙台しか残っていないが、その先は広い大地が広がり、ここから西域が始まるという往時をしのばせる雰囲気が残っていた。「・・・君に勸む更に尽くせ一杯の

酒 西のかた陽関を出づれば故人無からん」の王維の詩で有名だが、我々しか観光客がいなかったこともあり、この荒涼とした風景は王維のこの詩を連想させた。この陽関を守っている中年(老?)夫婦と久方ぶりに再会した同じ旅のメンバーが持参した以前訪れた時撮った写真の二人は青年だった。でもこの夫婦がこの間刻んだ時の経過は、陽関が刻んだそれに比べればほんの瞬間なのだろう。古代の関所・玉門関は漢の時代ここが西端だったから、文字通り西域への出口だった処。川が創った拓けた平野のど真ん中であって、その佇まいにはまだ少し往時の雰囲気を残していた。

ここから旅は大移動だった。敦

煌から西安まで二十四時間の列車の旅なのだ。「軟臥」という座り心地の良い寝台車という事だったが、乗ってみて驚いた。二段ベット、四人部屋の寝台は昔日本にあったものとは似たものだが、カーテンがないのだ。朝九時過ぎに敦煌駅を出発した列車は祁連山脈とゴビ砂漠に挟まれた河西回廊を驚くほどのスロースピードで走って行った。三回お世話になった食堂車の食事は結構おいしかったし、話に花が咲いて楽しかったが、説明も理由もなく止まって動かない列車には辟易した。これなら半分の時間で行けるなと思った。

女性が乗ってきた。上の段のベットだが、カーテンもなく大丈夫かなど心配になった。しかし、慣れているのか早々と休まれた彼女は身動きもせずに横になって朝を迎えた。「下の段で少しお休みください」と勧め、話を試みたら、なんと中国の中央銀行である「人民銀行」を退職したばかりで、息子さん夫婦のいる武威に行ってきたのだという。「私もずっと日本銀行にいました。同業者ですね」と言うところりされた。そうこうしているうちに列車は朝九時過ぎに西安のホームに着いた。予定通りだったが、こんなことは奇跡に近いことだそう

訪れていたし、新潟―上海―西安という定期航空路を実現出来た想い出深い都市だ。長安の都の最大の観光地は兵馬俑だが、久方ぶりに訪れた兵馬俑は一大観光施設に変容していた。かなり手前でバスを降ろされ、電気自動車で兵馬俑の近くまで運ばれる。どうしてかと思っていたら、帰りに分かった。帰りは土産物屋と食堂の並んだ参道を歩いてバス駐車場まで行くのだ。その店の数が半端ではない。私

かはあまり議論にはならないだろうなと思った。今回の旅のドラマはこれで終わりとはならなかった。西安空港から北京經由羽田に帰る予定の飛行機が北京の悪天候でキャンセル、次のフライト便に席を確保し、やと間に合った羽田行きだったが搭乗したまま北京空港から飛び立たない。二時間半機内で待ってやっと飛び立ったが、羽田に着いたのは日付が変わろうというギリギリの時間、聴けば羽田のホテルは一杯、新潟に帰る当初予定どころか泊まる処の確保も危うい。ぐずぐずしていれば空港泊まりだ。どうしようかと迷っていると、一緒したHさんが「品川の駅前のホテルは大きいから空いているか

朱鷺の縁で交流していた陝西省の省都・西安には知事時代何度か

だ。こうした大量のけばけばしい施設が歴史遺産に相応しいかどうか

もしれない」と言う。真夜中だしど  
うかなと思いつつ電話してみると  
「どうぞ」という。ほっとすると  
もに「これで今回の我がアドベン  
チャーの旅は終わった」と実感し  
た。

(平成二十九年一月二十四日)